

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 吉野 朋美

本論文は、『新古今和歌集』下命者である後鳥羽院の和歌活動とその作品を、時代状況や同時代の歌人たちとの相関において考察したものであり、本編である第一部と資料編（年譜・和歌拾遺）である第二部から成る。

第一部は三編十章で構成され、三つの観点を中心としている。一つは、後鳥羽院と政治とはどう関わるか、という問いである。具体的には後鳥羽院の和歌活動初期の「大内の花見」や熊野御幸、また水無瀬離宮での活動や最勝四天王院の障子和歌を扱う。まずはそれぞれの場の政治的・文化的な意義を見定めているが、それを歴史的な把握に終わらせず、そこで生み出された和歌が「君臣相和」の理想を具現化しているさまと関連づけつつ、作品を具体的に分析しているところに成果が見られる。とくに、『熊野懐紙』が結題の題詠であることの意味を問う着眼は出色というる。

二つ目は、後鳥羽院を和歌活動へと促したのはどういう和歌的環境か、という観点である。具体的には仁和寺と寂蓮とを取り上げている。中でも後鳥羽院と寂蓮との関係の考察は、これまで等閑視されてきた部分を掘り起こしたものと見え、きわめて重要な指摘である。

三つ目は、院の和歌作品やそれを支える表現意識および信仰が、同時代の状況や和歌史の中でどのように位置づけられるか、という観点である。建暦二年の時点における藤原良経追慕の意識、隠岐における『遠島百首』の改訂、隠岐における信仰などを扱う。このうち、建暦二年の後鳥羽院の和歌活動再開の契機に藤原良経への追慕があるとする指摘は、『後鳥羽院御口伝』の成立という重要課題にも一つの解答を提示する新視点である。また、『遠島百首』の改訂をめぐる、改訂されなかった作品の分析からその基本的性格を析出した考察は、分析方法も適確で説得力がある。

本論文の特徴は、歴史と文学との両側面から後鳥羽院の文学事績を跡付けようとするところにあり、従来ともすると一方のみに偏りがちだった研究史に、新たな展開をもたらすものと認められる。取り扱う文献が多岐にわたるゆえに、いくつかの文献の解釈については、さらに慎重な検討を要する箇所もあるが、多方面からの周到な分析にもとづいて提示された本論文の後鳥羽院像は、これまででない総合性と説得性をもつものと評価しうる。よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当すると判断する。